

渡辺敏雄 インタビュー

インタビュアー 渡辺英之

ブルーグラス45のベース奏者で現在はチャーチバック・トリオでマンドリンを務める、B. O. M. サービス社長で父、渡辺敏雄が10年かけて制作したアルバム『FICTION TWINS PLUS (Toshio Watanabe) / My Favorite Songs』の発表を機会にインタビューを試みました。

音楽との出会いは？

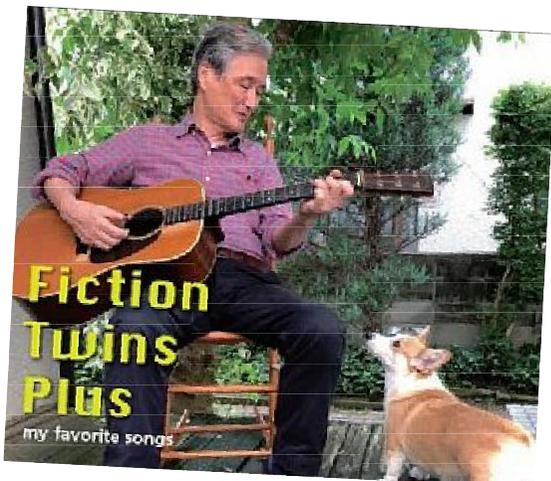
1949年ごろポータブル蓄音機が家にあってダイナ・ショアーの「ボタンとリボン」を聴いた記憶がある。それはほんとに幼少期で興味を持ったと言うよりそんな記憶があるということ。1958年ごろかな?! 10代になって「子供の科学」という雑誌にラジオの製作に関する内容があって大阪まで行って部品を集めて実際に作ってみた。そのラジオではじめてカントリー音楽を聴いた。ハンク・ウィリアムス、ウェブ・ピアス、アーネスト・タブなど。そこで以前アメリカの偉大なカントリーシンガーが亡くなったというニュースで聞いた人

物がハンク・ウィリアムスだったんだとわかった。そんな番組の中でながれるポップやフォーク音楽の中から聞こえる楽器名がわからない音がバンジョーだと知り興味ありと思った。

そして衝撃的な出来事が 中学生の時、三田（兵庫県三田市）のレコード& 楽器店にて45回転のレコードを一枚買おうと店に入り手に取ったのがバンジョーの写真があるもの。それ以外は全くわからず購入。なんとそれが日本コロムビアレコードからのフラット& スクラッグス。“Blue Ridge Cabin Home”と“Jimmy Brown the News Boy”だった!!ここから

より一層興味を持って音楽に接することになっていく。

あるラジオ番組で大阪アメリカ民謡研究会が紹介されてレコードコンサートや学生ライブなどが毎月開催されていることを知って通いはじめたのが1959年か1960年。アメリカ政府の機関でアメリカ文化センターというところ。そこ

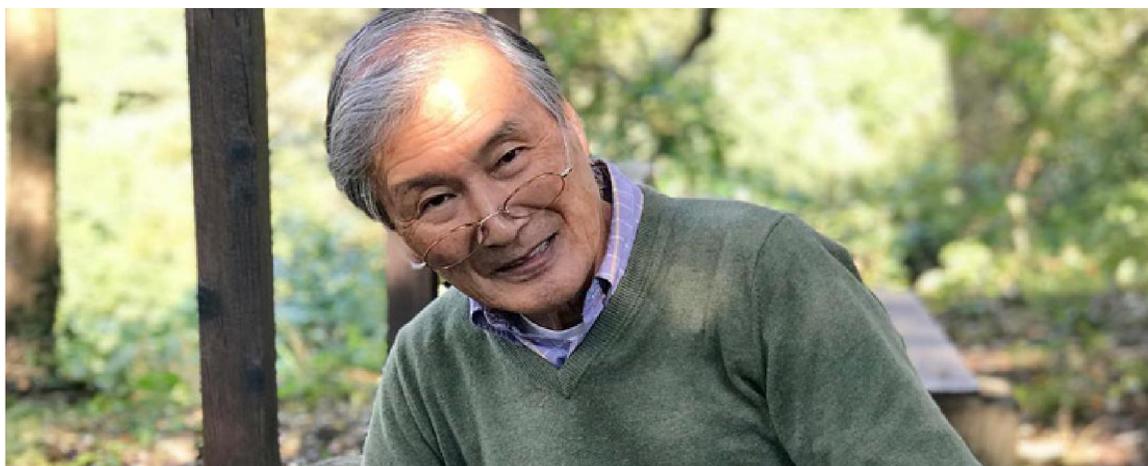


でリスナーやコレクターの先輩方と出会った。高校生になり音楽を聴き楽しむのはもちろん、楽器やバンドに関することまでいろいろ教えてもらったり話をしたり。研究会の事務管理もつとめたことがあった。演奏することにも少し時間を費やすようになったのもこの頃。マンドリン、そしてクローハンマーバンジョー。そして大学生になっても演奏者というよりはレコードコレクターといった意識が強かったかな。録音に関しても、この頃、テープレコーダーで多重録音をやってみたこともあった。本格的に機材を揃えはじめたのは2000年頃にクリス・シャープに見せてもらった彼のホームスタジオがきっかけだったね。

Fiction Twinsの録音はどのようにして行われた？

マルチのオーバーダブ録音、多くの方がご存知だとは思いますが、私なりの方法を少しお話します。

まずは曲のテンポから決めていくのですがイントロの楽器のイメージで決めるのがいいと思います。私の場合、歌で決めるとどうしてもスピードが落ちてしまうのです。……メトロノームやリズムマシンをまず録音してこれを定規のように使いました。これに合わせて仮歌なりを録音します。



その次にこれに合わせてリズムに「乱れなく」ギターを、そしてベース。これが大苦労ですが。ここで仮歌は聞かなくてもいいと思います。本番のボーカルを入れますが何度でも、短い一言でもやり直しができます。

前回のアルバムは中学、高校時代に聞いてショックを受けたモンロー・ブラザーズとその周辺の音楽と言うコンセプトだったのですが、今度はブルーグラスでとっていました。特に初期のローカル・ブルーグラスが好きで車の中で聞くのは50～60年代のものがほとんどです。なのでその雰囲気であればいいんだけどと思いました。

何年かにわたって録りだめたもので、そのとき思いついた曲に挑戦という感じで取り組みました。元になった曲を聴きなおすとそれに影響されると思いあえて聞きなおさず取り組みました。

曲の紹介をお願いします!!

“Girl I Love Don't Pay Me No Mind”

フィドリン・アーサー・スミスの曲ですが、元のメロディと少し変わっていますがブルーグラス・スタンダードとしてのメロディはこんな感じ、ブルーグラスのスタンダード・スタイルで。

“Bumming an Old Freight Train”

フラット & スクラッグスで、なぜか耳について離れない曲でした。2回目のドブロ・パートは2度とできないのですが大変気に入っています。カーター・ファミリーやブルー・スカイ・ボーイズによく似た曲がありました。

“How Will I Explain About You”

ダブルマンドリン、もともと全編マンドリンだったところ8小節ずつ入れ替わり立ち代りでフィドルとの掛け合いになりました。クリス・シャープ君、なかなかセンスいいですね。

“Knoxville Girl”

何年か前の忘年会で友人の鼻歌がこれも耳から離れず採用となりました。バンジョーのイントロとアウトロは“Cola Is Gone”ですね。マンドリンは1921年のGibson F-4、やはりこれですね。

“On The Sea Of Galilee”

カーターファミリーの曲ですが、使用したギターは1930年代のWasburn、サウンドがとても気に入っています。コーラスに奥方を加えたのですが初めての録音しかも英語で……奇跡的にうまくいったと思います。ベースを加えるか悩みましたが全体的に見るとあったほうがいいと思いました。

“Watson Blues”

60年代にテープで聞いてドック・ワトソンのギターがカッコいいな—と思い覚えていました。当時、ドックの“Black Mountain Rag”を聞いて挑戦しましたが早々にあきらめた記憶があります。“What Became Of That Beautiful Picture”

チャーリー・モンローの歌は独特の雰囲気を持っていていい曲がたくさんあります。ここではKey Of Aで歌っていますがチャーリーはKey of E位かな? 高い声です。イントロ、間奏すべて同じですがこれしか思いつきませんでした。

“Are You Tired of Me My Darling?”

これもカーターファミリーの曲ですね。ヤン・ヨハンソンのフィドル、チャビー・ワイズ風ですね。アレンジねー、これしか考えられないです。

“The Bluebirds are Singing For Me”

マック・ワイズマンとレスター・フラットの共演がいいなと思って取り上げました。イントロのバンジョー、かなり試行錯誤の上なのですが目立ちほしないのがいい（言い訳）。シンプルなフィドルとチャーリー・プール風なバンジョーのバックアップが気持ちいい雰囲気聞こえるといいなと思います。

“Go Home”

多重録音なのでカルテットやってみようかと思ったのがきっかけ。何十回取り直したか分かりません。

“Rocky Run”

60年近く前、当時、大学生の諸先輩が演奏していたのを見てびっくり、BG45でアメリカに行ったときステージ用のネクタイが行方不明になりある人からネクタイを借りてステージに上がりましたがその人がこの曲の作者のジェリー・スチュワートさん。Runは小川のことですがLloyd Loar Mandolinのエキスパート、トニー・ウィリアムソン宅の裏庭の先にRocky Riverが流れています。アメリカ先住民の伝説が神聖な川としての伝説が語り伝えられているそうです。その小川名をもじって曲名としたそうです。

録音は基本的にマンドリンからはじめたのですがバンジョー・パートの録音に際して大変でした。テンポが速すぎてバンジョーが追いつけないのです。昔は弾けたんだけどと思い直し練習の甲斐あって何とかクリアーできたかと思っています。

“Cyclon of Rye Cove”

これも再三の登場、カーターファミリーの曲、メロディのギターはMartin D-18、歌はトリオ・シンギング。いつだったか台風の後この曲をと思いついたのです。

“Don't Forget Me”

これはモンロー・ブラザーズから学んだ曲です。

Key of F、バンジョー・パートはスクラッグスの“Why Don't Tell Me So”からいただき、と言うのはすぐ分かってしまうかな。マルチトラック録音なので、ベースをはずし、バンジョーをはずし、フィドルをはずしていくとモンローブラザーズになるのが大変面白い。

“Mama Don't Allow”

ローカルなブルーグラス・ショーでよく取り上げられる曲。息子の渡辺英之がナッシュビル時代に大変お世話になったクリス・シャープ、テリーエルドリッジ、そして偉大なるアंकル・ジョッシュ・グレイブスと共に録音した中の一曲。若い人のパワーには追いつけないですがジョッシュは当然別格ですね。

録音に使った機材を教えてください

録音に使った機材ですが最新のものと言うわけではありません。

マイクロフォンは1950年代のRCA77Dリボンマイクロフォン、マイクプリアンプは「AEA TRP RIBBON MIC PRE」、インターフェースは「DIGIDESIGN 003 RACK」、ソフトウェアは「PRO TOOLS LE 8.0」、コントロールは「WINDOWS XP」といささか古いものですが仕事は十分こなしてくれたと思います。

使用した楽器は以下です。

Guitar: Martin D-28 (1954)、D-18 (1945)、

Washburn 5238 (000size 1930's X-braced)

Banjo: Gibson RB11 conversion (1930's)、

Gibson RB-3 1998

Mandolin: Gibson F5 (1941) Gibson F4 (1921)

Wade FW5 Master (2008)

Dobro: Asabro

Auto Harp: Orthey Carter Gold

Bass: Gereman no name 1900 3/4

最後に皆さんにメッセージを

1940年代から現在まで、同じ楽器編成で演奏されるブルーグラスと一言で言ってもイメージ次第で最終的なサウンドは全く違うものになる事を私は楽しんでます。今回、私が描いたサウンドが「My Favorite Songs」です。どうぞお楽しみください!!

★Moon Shiner 2022年 12月号より★